



NPO第26回総会報告ダイジェスト版

6/13(金)57名の参加にて開催！

指定管理者制度導入と随意選定、NPOの学童保育所運営について

熊取町の学童保育所は、2016年度まで民設民営で熊取町の補助金を受けながら37年間「NPO熊取子どもとおとなのネットワーク」(当法人)が運営してきました。2016年に熊取町は「学童保育条例」を制定し、2017年度より公設民営で指定管理者制度が導入され、“公募”により当法人が指定管理者として選定され、1期5年間、熊取町学童保育所の運営・管理をおこないました。

2期目の2022年度からは、「学童保育所は、子どもたちの保育の継続性が子どもたちの成長と発達を保障するうえで極めて重要であるという認識のもと、“随意選定”により一定程度の期間、継続して保育ができる体制を構築することが望ましい」ということで、随意選定により当法人が指定管理者として、さらに2期目の5年間学童保育の運営をおこなうことになり、今年で計9年目になります。

当法人は、「熊取町学童保育所」の唯一の指定管理者として、「施設および運営に関する基準条例」や「運営指針」、「事業計画」に基づいて運営・管理しておりますが、学童保育所を利用されている保護者のみなさんに、当法人の運営状況や方針をよりひろく知っていただけるように、当法人の「第26回総会」の報告を配布いたします。

なお、今回配布の瓦版は総会ダイジェスト版です。当法人は学童保育所事業以外にも、ファミリー・サポート・センター事業、地域に向けての発信事業も活動しておりますので(各クラブにNPOリーフレットを置いています)、瓦版 NO.3 総会報告集をお読みにになりたい保護者、また興味のある方は、職員または事務所までご連絡をお願いします。

6月13日(金)、第26回総会を熊取町ふれあいセンターにて、NPO会員である保護者・保護者OB・職員・賛助会員 計57名の参加者にて開催しました。総会では、2024年度の1年の活動のまとめや活動決算、監査報告などが次々と報告されました。

2025年度の高橋理事長による活動方針や、いろいろな立場の会員からの発言を中心に総会の様子をお届けします。



2025年度活動方針

高橋 淳（理事長）



2015年に策定された「放課後児童クラブ運営指針」が10年ぶりに改正されました。条文の中で注目したいのは総則で、子どもの最善の利益を優先して考慮して育成支援を推進することに努めなければならないという文言が改正されていることです。「優先して考慮し」という言葉が強く出されています。学童保育の関係者の皆さんがこの意識を持って進めていけばいい学童ができるのではないだろうかと思っています。

今年の3月に「熊取町こども計画」が策定されました。当法人を代表して私もこの計画の策定母体である子ども・子育て会議に参画するとともに、関係団体としてヒアリングを受けました。この計画では学童保育についてつぎの3点が示されています。①条例基準（1クラブ概ね40人以下）を満たせるよう、教育委員会や学校と連携して施設整備が必要なこと。②熊取町全体では施設の量は確保できているが、校区別では不足が見込まれるため対策を講じる必要があること。③安全・安心な学童保育を安定して実施するため、町と指定管理者が協力して放課後児童支援員の人材確保に努めること。

これは熊取町の課題を端的に示しています。計画は実行されることが重要であります。この計画が町組織の中でイニシアチブをとり実現されることを願います。

今年度は学童保育所入所申請受付時において、中央・西学童の2か所で施設の許容人数をオーバーしました。早急な3クラブ化が求められている東学童保育所については103名と許容人数を9名下回りました。とはいえ、条例基準の1クラブ概ね40人以下を大幅に上回っており、3クラブ化の必要性がなくなったわけではありません。町は中央学童については4クラブ目として民間の賃貸物件「ポエムビル」の3階を、西学童については民間の一戸建てを分室として借り上げ、学童保育所として確保しましたが、学童保育には多くの課題がありました。賃貸物件では、部屋の構造や遊び場の問題、トイレ、炊事場設備、周りの環境などを生活環境として様々な問題があります。また一小学校区内の学童保育所の分散により人員配置の難しさが生じます。継ぎはぎで応急措置的な民間施設ではなく、学校敷地内の学童保育所が子ども・保護者にとって最も安全で、ベストな施設であると言えます。「熊取町こども計画」の中で、教育委員会や学校と連携して施設整備が必要なこととありますが、なかなか現実には実行されていないのが現状であります。

これまで夏季等の長期休業期間限定利用学童保育所には、3小学校区内に新たな限定利用学童を開設していましたが、常勤支援員の不足にクラブ数の増加も相まって運営できない状況に陥りました。通年利用の学童保育所で常勤支援員を2名配置すること自体が難しくなっている状況です。理事会では、通年利用学童の質の確保と継続していくためにも今夏より限定利用学童の中止という苦渋の決断をし、町へ1月末に伝え、他の事業者・方法での限定利用学童の継続を要請しました。限定利用学童の中止は今後、通年利用学童の増加も予想され、夏休み等の子どもの居場所が課題となりますが、町もホームページでその対策をのせています。

2023年度のモニタリング評価は、総合評価「優秀」満点に対して7割以上の得点を得て、「おおむね適正に運営されており町が求める水準に達成している」と講評を受け、随意選定としての求められる水準を昨年に引き続き満たしました。一方で、情報化社会の中での通信手段等のICTの整備の必要性を指摘され、今後ICTの整備に向けての調査を行ってまいりたいと考えています。

熊取町だけでなく、全国的に支援員不足は深刻で、クラブ数に対して必要な常勤職員（準職員）が確保できないのが現状です。処遇改善として、当法人においても俸給表を見直し、基本給のベースアップを実施しました。理事会ではさらに「人材育成と働き続けられるモチベーションアップにつなげる」給与体系の見直しに向けて、理事会代表と指導員労働組合で検討委員会を設置し、責任ある人事体制に見合った給与体系の見直しを行い、役職手当の新設、初任給の給与規定の改定、準職員の俸給表の新設により新たな給与制度を実施しました。しかし特に近年、クラブ数の増加により支援員が不足し、経験の浅い支援員

も増加していることに対して、人材の確保や定着等の人材活用上の課題を解決するための方策の一つとして、ライフステージに合わせて働き続けられる職場環境実現のため、厚生労働省が推奨している「短時間正社員制度」導入を昨年6月1日より導入しました。今年度は主任支援員2名を配置し、人事体制の強化整備を行っていますが、支援員不足で統括責任者以下、現場にサポートで入ることも多く、なかなかその役割・機能を果たすのが難しい実情です。

以前は支援員と一緒によりよい学童保育を作っていきたいということで保護会も活発にやってきましたが、今はそういう意識も薄れています。保護者も完璧なサービスを求めて少しのミスも許さないという感覚になっている部分もあり、支援員とともによりよい学童保育をつくっていくという意識は希薄になっているという印象を受けます。そういう中で、職業も年齢も違う保護者同士が子どもを通じて繋がり、支援員と保護者で子どもの情報を共有し、悩みや心配事を共に語り、成長を喜び合う、日々忙しい日常だからこそ子どもと向き合う、そんな保護者会が必要ではないでしょうか。支援員が保護者と保護者を繋げていく役割が重要だと思っています。

「NPO」会員が減り続けて、財源も少なくなり、「NPO」自体の活動がしづらくなっています。次世代を担う人材の確保という課題では事務局も高齢化している現状です。学童保育の規模が大きくなり、また学童のクラブ数が17クラブに増えたことで、これまでの運営体制を見直すことも検討することが必要と考えます。

発 言

① 学童保育支援員～20年を振り返って～（南学童たけのこ村支援員）

20年を振り返ると本当にいろんなことがありましたが、いろんな支えがあって「なにくそ根性」で続けてこれたのだと思います。

学童の仕事は、子どもたちの日常の姿や様子からどんな願いや思いを背負って学童に来ているのか、保護者がどんな思いで学童にわが子を通わせているのかなどを知ろうとする、わかりたいと思う支援員の思いやまなざしがとても大事だと思います。頭では大事なことだと思いながら、子ども理解の力が弱かったり何もわかっていなかったり、保護者を不安な気持ちにさせてしまったこともたくさんありました。そのたびに、自分にはできない、考えられない、ムリだと目をそらし逃げたい気持ちになっていました。こどもや保護者のことを考えていたはずなのに、気づくと自分のことになっていることすら気づいていませんでした。自分の足りていないことが何なのか、自分の根っこに落とし入れないと一歩も二歩も進めません。そんな気持ちと葛藤しながら今も続けてこれたのは、厳しくもあたたかく背中を推してくれる支援員たちがいたからです。いろんな人の力をかりながら、子どもや保護者から目を背けず流さず逃げず、一歩をふみこんでいける支援員になりたいと思います。

② 保護者会への思い（北学童ペンギンクラブ保護者・理事）

わが子が学童保育にお世話になり始めたのは約11年前。息子の頃の保護者会は、がっつりと活動していてクラブ総会はもちろん、クラブ代表や役員などの役割を必ず各家庭1つを担っていました。保護者会も月に1度あり、当時の私は「何やねん、めんどくさいなー」とそれほど参加した記憶はありません。しかし、役割が一緒だった保護者の方に、「保護者会に1回一緒に行こう」と誘われ、断りきれず参加しました。参加してみると、異年令の保護者の方たちの話や、支援員から子ども達の学童での様子の話があり、とても楽しく過ごせました。そして、保護者会行事で、こどもまつりに要員で参加しました。会議や準備は大変でしたが、当日子ども達の遊んでいる姿を見て「やってよかったなー」と思えた自分がいました。その感動が忘れられず、今でもこどもまつり実行委員に参加しています。

それからは、同じクラブの保護者の方に声をかけてもらえたり、顔なじみの人も増えたりと大人のつ

ながらもでき、その人たちがいたから保護者会や保護者会行事への参加ができました。

今の保護者の方たちは、学童保育を、保育所や幼稚園の延長として預かってもらっていると思う人が多いように感じます。私は、わが子に「学童に行きたくない!」と言われるのが一番不安です。毎日学童に行く時に泣いていた娘も、今では楽しんで笑顔で学童へ行ってくれていて、家ではできないこと、できない遊びなどを支援員に教えてもらっています。6年間楽しんで、うれしそうに帰ってきた息子を見て、学童が第2の家になっていたと感じたし、安心して働くことができます。そして学童をよりよくしていくためにも、保護者同志のつながりが大切だと思います。保護者会に、参加したことない人も、参加している人も、私のように保護者会があってよかったと思えるような保護者会を保護者と支援員で作っていかれたらと思います。



③ 学童保育における保護者の役割（西学童OB保護者・職員）

「学童保育における親の役割」をAⅠに聞いてみました。『親の役割は単なる「預ける者」ではなく、子どもの教育と福祉の共同責任者としての姿勢が求められる』とありました。「共同責任者としての姿勢」と聞いて、学童保育の現場で気になることがあります。それは何かトラブルがあると、保護者自身の考えや思いばかりに終始してしまい、本来主役である子どもの気持ちが置き去りにされているのではないかと感じることです。

先日、立川市の小学校であった事件でも、あの母親には「共同の責任者」という意識がなかったことがこの問題の本質ではないかと思っています。トラブルを学校のせいにして学校を責めても何の解決にもならないのです。学校と学童保育の違いはありますが、本質的には同じで「共同責任者としての保護者の姿勢」の問題だと思います。

自分が現役の保護者の時は「共同責任者としての保護者の姿勢」ということは全く考えていませんでした。それでも我が子のために少しでも学童保育そのものや学童保育所がよくなるように時間を割いてきました。父親として子どもたちの成長に具体的に関わりたい、学童保育所を通して子どもたちと向き合いたいと考えていたと同時に、子どもたちが安心してより良い保育を受けることができる環境や場所を保証することを他人任せにはしてはいけないという思いがありました。それが「共同責任者としての保護者の姿勢」なのかなあとも思います。

時代も変わり、学童保育所を取り巻く状況やシステムは当時と変わりましたが、我が子の成長を願う保護者の気持ちや子どもの成長に対する保護者の責任はいつも同じだと思います。学童保育という場所で、成長する子どもたちを見守る保護者としてどのように子どもに関わることが我が子の成長に繋がるのか、またその成長に対する「共同責任者としての保護者の姿勢」とはどういうことなのかを一緒に考えてみませんか。

④ 主任支援員より（学童保育所主任支援員）



学童保育はこどもたちあつての学童保育です。4～5月に中央ぽかぽかクラブに入った時の1年生のRくんの話をしたいと思います。Rくんは控えめな性格です。ある日、1年生だけで『川わたり』というあそびをしました。そこに5年生が入ってきてオニをしました。5年生のオニにRくんを含めた1年生たちは向かっていきます。みんなで力を合わせて作戦を練って、見事作戦成功。その日のおやつ時間に今までそんなこと言ったことないRくんがよほど楽しかったのか、「おやつ後にまたやろう!」次の日も「川わたりしよう!」と自分から言いだしました。Rくんの保護者にその様子を伝えると「毎日誇らしげな顔で帰ってきます」と。子どもたちは学童保育の生活の中で生身の心と身体をぶつけ合って、その熱意を心と肌でキャッチして、ワクワクドキドキ、悔しい、楽しい、泣いて、怒って、笑って、喜んだり、

自分もなかなかやるやんと自らを誇らしく思ったり、あの子すごいなと認めたり。そうやって気持ちを揺らしあって響かせ合って、それを肥やしにして子どもはこどもたちの中で育っていく。放課後、心と身体を開放された時間、みんなで関わる中で、ゆっくりじっくりたっぷり、子ども時代を生きる、これは学童保育だからこそできる可能性があります。このきゅうくつな生きづらい社会の中で、こどもたちを守り育てる責任のあるおとなの一人として、こどもの最善の利益を保障する学童保育の役割を果たしていることにやりがいを感じます。支援員も人が足らずに体制もギリギリですが、支援員としてどうありたいか、どんな学童保育所にしたいのか、どんな支援員になりたいのか、子どもを通して考え、子どもたちの中でエネルギーをもらいながら、子どもたちと一緒に育ちあっていきたいと思います。

.....

⑤ 会場より

（中央学童保育所保護者）

現在6年生のわが子が1年生の時からお世間になっています。子どもたちは学童が大好きで毎日思いきりあそんで楽しんで帰ってきます。我が家は毎日18時をまわるまで、そして長期休暇中もみっちり通っており、子どもたちにとって学童保育は生活の一部です。上の子は丁度、コロナが始まった時期の入所だったので、この6年間は特に、支援員の方たちは大変な中で本当にいろいろ工夫をしながら保育を支えてくれたと感謝の気持ちでいっぱいです。

コロナ禍で人と人とのつながりがうすくなりつつある中、学童はその時々の方策をしながら、工夫しながら、子どもたち同士の交わりや関わり、つながりを大切に、年齢や性別関係なく育ち合う環境を大切にしてきてくれ、子どもたちを見ていると、世の中のつながりが稀薄化していくこの時代に、本当に子どもたちの育ちにとって大切なことを経験させてもらっているなど感謝していました。

そんな中、去年上の子が5年生の時にずっと通いつづけたクラブをはなれ、違うクラブにいくという状況になりました。ずっと一緒にすごしてきた安心できる環境、自分の居場所から離れること、弟とも離れること、友だちとも離れること、大好きな支援員と離れること、いろいろな不安が一気にのしかかり、親子で不安でいっぱいになりました。結果、途中から元のクラブに戻ることができましたが、このような状況は今後もうくり返さないように考えていってほしいと声をあげた中、今年新たに施設を増やして頂き早急に改善していただけたこと感謝しています。今後も子どもたちにとって、そして私たち保護者も安心して預けられるこの環境を守っていただけたらうれしいです。

（北学童OB保護者）

今年中3になる娘が、小4の2学期から不登校気味になりました。突然のことで親として戸惑い、相談できる窓口も少なく、今よりも不登校への偏見もあり、心身ともに疲れ果てていました。その頃、コロナ禍の影響もあり、社会とのつながりがなくなり、このままでは親子で共倒れになると感じ、学童への入所を相談しました。学校へは足がなかなか向かなかった娘が学童には主体的に通いました。私達夫婦もその時から「ぼちぼちいこ会」に参加させてもうようになり、不登校の子をもつ他の保護者さんの子育て経験は私の中にスーッと入ってきました。うちの娘のことを理解してくれる皆さんの存在に親子ともども安心安全の場で、喜怒哀楽の感情を出せて悩みを相談でき、寄り添っていただき、娘にとっては何がいいのかを一緒に考えて頂いていることが本当にありがたいし心のよりどころになっています。

（西学童OB保護者）

子どもはもう37歳です。孫もいます。西学童の代表を何回したかわかりません。トーク＆トークの責任者も何回したでしょうか。忘れたくらいたくさんやりました。「子育て親育ち」という言葉が大好きでした。今は「爺育ち孫育ち」というのをやりたいです。今、若い保護者の方、頑張っている指導員の話聞いて、これからまだ伸びしろあるなあと思いました。熊取こどもとおとなのネットワークに微力ではありますが、お手伝いできることはやりますので、皆さん頑張って下さい。そして楽しんで下さい。

閉会あいさつ ～まとめにかえて～

岩城千映子（副理事長）

活動のまとめにもあったように、学童保育事業では、人材確保の課題が非常に大きいのしかかり、運営のあらゆるところに影響を及ぼしている状況です。そのような中、なんとかやりくりをし、何とか乗り切っていただいたことに、支援員さんをはじめとする皆様に感謝の言葉しかありません。

さて、『日本の学童はいく』という冊子の2025年3月号に、私がとても感銘を受けた記事があります。大東文化大学、松田洋介先生の「私の世界から私たちの世界へ」です。ここ最近の社会的背景や子ども時代になにか意見を表明することが積極的に評価されていないうえ、子どもの放課後の生活が大きく変容したことにより、日本のこどもたちは自分たちの要求を表出することを学べていないというものです。

かつての子どもたちは放課後に一緒に遊ぶ中で、ルールをめぐって争いを繰り返し、より魅力的な遊びを創造し、それをおして自分たちの自治的な世界を作っていました。その経験を積むことで、他者にあわせるだけでなく、我を通すだけでもない、共同関係をつくるための知恵や技を獲得していきました。でも今は、塾や習い事などに通う子どもが増加して、出来る限り争いが起こらない環境を整えられ、争いが起きたとしてもすぐに大人が介入するようになったというのです。このことは、その場に身をゆだねるだけで、その場所が合わなければ別の場所に移動することで解決するといった具合です。でも、このことは、人との交わりからくるストレスを下げることはできますが、共同関係を作る知恵や技は磨かれないまま、大人になっていくということなのです。社会とは共同のもの。社会から切り離して、個人単独で生きていくのは非常に困難です。

「共同の子育て」を標榜する私たちは、子どもたちが「私から私たちの世界へ」を獲得する礎を学童保育の中で実現していきたい。私たちの学童保育所には、自由な時間と空間、子どもたちを支える指導員さんと保護者がいるのだからと言えるように、来年度も活動を進めていきたいと思っています。



セレモニー

古谷幸与利支援員の勤続20周年をお祝いして、表彰状、記念品、花束が贈呈され、職員からメッセージ集がプレゼントされました。古谷支援員からは、「こんな風に祝ってもらえてすごくびっくりしています。感謝しています。若い支援員たちも20年、30年とがんばってほしいと思います。」とあいさつがありました。

